

新冠にまつわるお話しを集めた 新冠百話

第三十五話 「新冠にきたコタンのシユバイツァー」

(要約文)

白老町に「高橋房次」という医師がいました。明治から昭和時代にかけて、地域医療に心血を注ぎ、アイヌの人たちへの診療を率先して行ったことから、「コタンのシユバイツァー」、「白老の父」と呼ばれた人物です。その功績から、白老町名誉町民を授与され、半生が書籍や演劇、テレビにとりあげられました。白老町には今でも銅像が残り、知らない人がいない、まさに「偉人」のように伝えられてきた医師です。実はこの高橋医師が、新冠に「村医」として赴任していたことはあまり知られていません。

高橋房次は明治十五年、栃木県に九人兄弟の五男として生まれました。二十一歳の時に医師資格取得試験に合格、その後、青森、新冠、現北広島市の転院を経て、大正十一年、白老の地に落ち着きます。当時、アイヌの人たちは病気になっても病院へ行くという習慣があまりなく、命を落とすことが多かったといえます。そのため、房次はまずアイヌの人の家を一軒一軒訪ね、住民と対話しながら情報を共有しつつ診療をはじめました。やがて、市街地から十キロ以上も離れた開拓地の拓殖医にも任命されたため、自転車で遠方まで往診を行い、診療代を払えない人には催促をしませんでした。当時、和人とアイヌの人たちとの間には、まだ大きな隔たりがありましたが、房

次は区別をすることなく、どちらも同等に接したので皆から尊敬されました。その後も、白老で懸命に医療活動を続けた房次でしたが、昭和三十五年に生涯の幕を閉じました。「町葬」となったその葬儀には、助けしてもらった大勢の人たちが長蛇の列をなし、悲しみに暮れたということです。

白老で功績を残す前、大正四年に新冠へ村医としてやって来ました。開業していた場所は現在の本町です。新冠においてどのような診療活動をしていたのかについては、残念ながら詳しくわかっていません。しかし、房次が父親に宛てた手紙には、新冠の土地が広大で、多くのアイヌの人が住んでいることを綴っています。房次がいた頃の新冠は、大部分が軍馬を育成する「御料牧場」として活用されていました。そのような中、大正五年に姉去地区(現大富)のアイヌコタン(集落)が、御料牧場の飼料地となることに決定されたため、平取へと強制移住させられてしまう出来事が起ります。房次は大正八年まで新冠に赴任していたので、この出来事を目の当たりにしていたことになりそうです。アイヌの人々に対する不平等扱いを肌で感じたことが、その後の白老における診療活動の原動力になったのではないのでしょうか。



在りし日の高橋房次

シートベルトの全席着用

- 同乗者の着用はドライバーの義務
 - 車外放出により致命傷の危険も
 - 後部座席も必ず着用を
- 静内警察署

火災・救急出動状況 () かつこ内は前年同期

区分	火災件数	救急件数
5月	1件(0件)	26件(13件)
3年1~5月	2件(0件)	128件(96件)

交通事故発生状況 () かつこ内は前年同期			
区分	発生件数	死者	傷者
5月	0件(0件)	0人(0人)	0人(0人)
3年1~5月	3件(1件)	1人(0人)	2人(1人)

人のうごき

(5月末現在)

人口	5,299人	(前月比 - 30人)
男	2,598人	(前月比 - 18人)
女	2,701人	(前月比 - 12人)
世帯	2,760世帯	(前月比 - 7世帯)

町公式ホームページ

町公式フェイスブック

